

SHOW HEYシネマルム

Data

監督・脚本・編集：ファン・ホセ・カンパネラ

原作：エドゥアルド・サチェリ

出演：リカルド・ダリン / ソレダ・ピジャミル / パブロ・ラゴ / ハビエル・ゴディーノ / ギレルモ・フランチェラ / ホセ・ルイス・ジョイア

瞳の奥の秘密

2009年・スペイン、アルゼンチン映画
配給 / ロングライド
129分

2010 (平成 22) 年 8 月 29 日鑑賞

シネ・リー플梅田

👁️👁️ みどころ

こりゃすごい！こりゃ面白い！あの賞、この賞の受賞が伊達でないことは、鑑賞後の充足感ですぐにわかる。まずタイトルがいい。そして、中盤からぐいぐい引き込まれるスリルとサスペンスがいい。また、一貫して抑制されながら、ラストシーンで解放される(?)男と女の愛の姿がいい。

さらに特筆すべきは、ラストに向けてのいくつかの驚愕の展開。こりゃ今年のベストワン作品かも？やはり名作映画は、何よりの心のよりどころだ。

* * * * *

こりゃすごい！こりゃ必見！

本作は2009年のアルゼンチン・アカデミー賞で最優秀作品賞等計13部門を受賞したほか、2010年の第82回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した作品。新聞紙上でも絶賛されていたから、当然映画館は満席。まず引きつけられるのは『瞳の奥の秘密』という何とも思わせぶりなタイトルだが、そのタイトルがピッタリのミステリーが次々と展開していく。テーマは、1974年に発生したある殺人事件。被害者は銀行員リカルド・モラレス(パブロ・ラゴ)と幸せな新婚生活を送っていた、23歳の美しい女性教師リリアナ・コロト。さあ、その犯人は誰？

「瞳の奥」も深いが、映画も奥深い

そんなテーマをみていると、本作が絶賛されたのはスリルとサスペンスに富んだ犯人捜しのミステリーのせい？たしかに、犯人捜しの中で、若く美しいリリアナをじっと見つめる男イシドロ・ゴメス(ハビエル・ゴディーノ)の存在をベンハミンがアルバムの写真か

ら発見し、「こいつが犯人だ！」と断定していくところから始まる犯人捜しのミステリーとサスペンスは面白い。そして、そんな展開を見ていると、ミステリー面で「瞳の奥」が大きな意味を持っていることがよくわかるが、この瞳はあくまでゴメスの瞳だ。

本作がすばらしいのは、『瞳の奥の秘密』というタイトルがもう一つ、つまり本作の主人公たる書記官ベンハミン・エスポイト（リカルド・ダリン）と新たに判事補として赴任してきた才女イレーネ・メネデス・ヘイスティングス（ソレダ・ビジャミル）との恋模様にも効いていること。リリアナをじっと見つめる殺人者ゴメスの瞳の奥にも大きな秘密が隠されていたが、まぶしいばかりの美しさを放つイレーネを見つめるベンハミンの瞳の奥にも、大きな秘密が……。

今と25年前を同じ俳優がしっかりと！

ベンハミンを演じたリカルド・ダリンも、イレーネを演じたソレダ・ビジャミルもそれぞれアルゼンチン・アカデミー賞最優秀主演男優賞、最優秀主演女優賞を受賞。それが当然と思えるのは、リカルド・ダリンもソレダ・ビジャミルもそれぞれ見事に現在のベンハミンとイレーネと25年前のベンハミンとイレーネを演じ分けているためだ。

映画は、刑事裁判所を定年で退職したベンハミンが小説を書こうと苦悩している姿からスタートする。彼が小説のネタとして使おうとしているのは、1974年に起きたリリアナの殺人事件。彼は25年間この事件のことをどうしても忘れることができないわけだが、さてそれはなぜ？アルゼンチンの定年は65歳らしいから、1974年当時の彼は40歳。定年退職後、孤独と向き合いながら25年前の事件を題材として小説を書こうとしているベンハミンと、現役バリバリの書記官として殺人犯の捜査に意欲を燃やす1974年当時のベンハミンのいわば2役を、リカルド・ダリンが見事に演じている。

他方、年をとるのは男も女も平等だから、1974年に若く美しい判事補として赴任してきたイレーネの25年後は？ベンハミンが小説のことを話すために久しぶりに出向いたのは当時の職場。そこにいるのは、今は検事に昇格し、2人の子供の母親としてテキパキと仕事もこなしているイレーネだが、その美しさは？イレーネの判事補就任が25歳だとすると、25年後の今は50歳。30歳だとすると今は55歳だ。イレーネを演ずる女優は1969年生まれだから、そもそも50～55歳の「おけ役」をやるのはかわいそうだが、それでも彼女はしきりに老眼鏡を操りながら25年後のイレーネ役を熱演。ベンハミンの老けぶりに比べれば、イレーネの若さと美しさはまだまだ十分健在。するとひょっとして、そんなイレーネを見てベンハミンの瞳の奥には再度輝きが……？

書記官がなぜ？最初は大きな戸惑いが……

本作には、脇役ながら存在感タップリの演技をみせるパブロ・サンドバル（ギレルモ・フランチェラ）が登場する。パブロはベンハミンの同僚で部下の、ちょっと手のかかる友

人。手がかかる理由は、酒好きの彼がいつもバーに入り浸っているためだ。そして、映画は当然のようにベンハミンとパブロが警察と一緒にあって犯人の捜査にあたる姿を描いていく。しかし、ちょっと待てよ。裁判所の書記官がなぜ警察と一緒に犯罪捜査を？そこらあたりがわからないので、最初は大きな戸惑いが……。この戸惑いは映画鑑賞後パンフレットを読んでも変わらなかったが、それは制度の違いとして理解すればよいこと。そんなくだらないこと(?)に気をとられることなく、「違法捜査」もいとわない(?)ベンハミンとパブロの犯罪捜査の熱心さをじっくり確認したい。

しかして、そんなパブロが意外にも犯人捜しにおいてゴメスが出したたたくさんの手紙の謎を解くカギを発見するからお立ち会い！さらに、ラストに向けて驚愕の展開を見せる本作において、このパブロが重要な役割を果たすから、それにも注目！

1974年、日本VSアルゼンチンは？

1974年は、私が弁護士登録をした年。登録後直ちに私は公害裁判の活動に邁進したが、1960年代の高度経済成長を経て1970年の大阪万博を迎えた日本は1974年当時「わが世の春」を謳歌していた。そんな時代に、日本の裏側にある南アメリカ最南部の国アルゼンチンは？アルゼンチンと言えば、マドンナが主演した映画『エビータ』(96年)が有名だが、「聖エビータ」と慕われたエヴァ・ペロンはペロン大統領の妻。1974年に病に倒れた亡き夫の遺志を継いで、副大統領から世界初の女性大統領に昇格したのがこのエヴァ・ペロン。しかし、残念ながら人気だけでは難局を乗り切ることができず、1976年には軍事クーデターによってエビータ政権は崩壊した。つまり、1974年は軍事クーデター直前の不穏な時代状況にあった時期なのだ。

同じ1974年という時代でも、大阪万博終了後も平和に繁栄し続けている日本と、軍事独裁政権樹立直前のアルゼンチンでは大きな違いが……。

なぜゴメスが？どこに正義が？

映画の中では、終身刑を宣告されたはずのゴメスがテレビに映っているのを見てビックリしたモラレスがベンハミンに電話をするシーンが登場する。ベンハミンが確認すると、たしかにそれはゴメス。ゴメスは大統領を警護するSPとして雇われていたわけだが、終身刑の判決が確定したはずのゴメスがなぜ？それは、ベンハミンとイレーネの上司の説明によると「行政的恩赦」のためだが、そんなバカな！

その「抗議」に出向いたベンハミンとイレーネに対する上司の「反撃」は面白い。つまり、ベンハミンやイレーネが言う正義ではない、もっと大きな政治的抗争とその中における正義があるらしい。さらに、そこで上司が指摘したのはベンハミンとイレーネの身分の違い。つまり、アメリカの大学を卒業したエリート判事補たるイレーネと、高卒でしかない書記官ベンハミンとの身分の違いだ。露骨にそれを指摘されたベンハミンのショック

は？しかし、以降ベンハミンのイレーネへのアプローチは消極的に・・・？

それはともかく、ペロン大統領が死亡し、軍事独裁政権が樹立される直前のアルゼンチンでは、ベンハミンやイレーネの信じる「正義」などどこにもなかったらしい。

アルゼンチンは死刑の国？それとも・・・？

去る8月27日死刑執行の刑場がマスコミに公開されたため、新聞、テレビは一斉にそれを報じた。千葉景子法務大臣はかねてからの持論どおり、これを一つの契機として死刑廃止の是非について真剣に論じていきたいらしいが、さてその行方は？死刑廃止論者の一つの提案は、現在の無期懲役刑の上に終身刑をプラスしようというもの。中国は「死刑大国」だが、現在死刑のある国は58、ない国は139で、ない国の方が圧倒的に多い。そして意外にも(?)、アルゼンチンも死刑がなく、最高刑は終身刑らしい。

ずっと駅に座り続ける執念をみせたモラレスとベンハミンたちの懸命の捜査によって、逮捕されたのはゴメス。被害者の女性リリアナをじっと見つめていた幼なじみの男だ。犯行を否認するゴメスを自白させたのは、「あんたのような貧弱な男にあんな犯行ができるわけがない」と罵倒したイレーネ。そんな挑発に乗って激昂し、自慢気に「やったのは俺だ！」と自白するゴメスはかなりバカだが、そんな高等戦術を駆使して自白を引き出した新米判事補のイレーネも立派なものだ。

死刑と終身刑、どちらが重い？

しかし、ゴメスは終身刑の宣告を受けたわけだが、本作で興味深いのは死刑と終身刑のどちらが重いかという論点の設定。ベンハミンとモラレスとの対話シーンの中で、ベンハミンは死刑反対論者だと語られる。そんな場合、妻を殺された夫の立場としては、「何を言うか！加害者は当然極刑に処せられるべきだ！」と叫ぶのが当然だと思うのだが、そこでのモラレスの反応は意外にも「僕も死刑には反対だ」というもの。なぜ、モラレスはそんなに冷静でいられるの？しかし、これをその額面どおり受け取るのはあまりにも単純というものだ。

前述のように、本作はベンハミンとイレーネの瞳の奥に秘められたラブストーリーの展開が一つの軸だが、終盤からラストに向けては次々と驚愕の展開が待ち受けている。たしかに死刑は一度執行してしまうと取り返しがつかなくなる恐ろしい刑罰だが、考えてみればそれは一瞬で終わってしまうもの。そうすると、終身刑よりも死刑の方が楽？すると、それを被害者の視点で言うと、「一瞬で死んでしまうなんて許せない」ということになるのかも？つまり、妻を奪われた夫たるモラレスはその悲しみを一生背負って生きていかなければならないのだから、殺人犯にもできる限り長生きして虚しい日々を過ごさせたいと思うのも当然？さあこんな風に考えると、死刑と終身刑どちらが重い？

2010(平成22)年8月30日記